

# 開院 20 周年に憶う

名誉院長 滝沢 敬夫

歳月の流れは速い。栗橋病院の開院は平成元年 7 月 1 日であり、この 7 月には開院 20 周年を迎えると言う。誠におめでたいことである。

もともと本院は地元（栗橋町）、済生会、東京女子医大の三者の協力下に開設されたものであり、医師補給は専ら女子医大の、それも現職職員によっている。それは、本来、卒業生が女子ばかりで男子校のように関連病院を必要としなかった女子医大が、来たるべき医師過剰時代（当時はそのように考えられていた）に備えて卒業生が自由に研修できる病院を確保しておく必要に迫られていたからである。

初代院長は第四内科の杉野信博教授で、現職のままの兼務（非常勤）であったため、市岡四象教授（院長代行、故人）が之を助け、医員はすべて大学に籍を置いたままの派遣医であった。

大学を定年退職した私が院長に就任したのは病院開設から 2 年を経た平成 3 年 6 月である。

私が着任した当時さえ、病院の周りは緑一面の田畑で、正面玄関へのアプローチを除いては道路は舗装されないままの畦道であり、之も新設されたばかりと思われる駅舎（東武日光線、南栗橋駅）との間（約 300m）には遮るもの一つない見通しであった。田圃の中にポツンと孤立する病院に果たして患者さんはやってくるのかと不安が先立ったものである。

ところが現在、病院周辺には栗橋町幹線 1 号をはじめ舗装道路が整備され、年々増え続ける家並に南栗橋駅舎も全く見えなくなってしまった。近隣には分譲地も開発され、コンビニ、スーパーマーケットも出現、病院の一隅には銀行（ATM）も設置され、如何にも町らしい雰囲気を備えるようになってきた。営団地下鉄（半蔵門線）が乗り入れるようになったのも数年前のことである。

「昔、町作りの中心は教会であったが、その後、銀行となり、今は病院が町作りの中心になった」との一文を目にしたことがあったが、南栗橋地区の開発はまさに之を地でゆくものと言えよう。

20 年の歳月の重みをしみじみと感ずるものである。

しかも平成の初期といえば、それ迄、高度成長に浮かれていた日本経済にようやく翳りがみられ、バブル崩壊の幕開けとなった頃であり、年間 30 兆円にも達した国民医療費への風当たりは強く、診療報酬もついにマイナス改訂に落ちこんだ時期に当たっている。このような厳しい環境の中で、大学病院での勤務医の経験しかなかった私が人並みに院長業務を果たしてこられたのは偏に職員各位のご尽力によるものと感謝している。

その上、平成 10 年には県の地域保健医療整備計画の見直しにより念願の増床（80 床、のち 100 床）が認められ、スーパーアメニティ資金による新病棟（東館）を増築、300 床病院として面目を一新することが出来たことは私の在職中、最大の喜びであった。東館の建設は平成 11 年 6 月に完成し、旧棟（本館）のリニューアルも行い、平成 12 年 4 月には病院開設 10 周年の記念式典と併せて東館の竣工式を行い、之

までご支援頂いた関連各位にご披露することができた。

平成 16 年 10 月、私は後事を遠藤副院長（現院長）に託して引退したが、それは聴力の衰えに加えて IT 化による業務の高速化に老齢の私では到底追いついてゆけないからであった。遠藤院長は私より 30 歳も若い、大変な勉強家で期待するところは大きい。世界的経済不況に加えて医師不足など、年毎に厳しくなる医療環境の中でその職責を見事に果たされ、20 周年を立派に迎えることができたことは大変嬉しいこととお祝い申し上げます。と同時に埼玉県東部の県民の健康を守る中核病院として一層発展されることを心から祈る次第である。

最後に、病院創設以来、ご支援戴いた関連各位に重ねて深く御礼申し上げます。



東館建築地鎮祭（平成 10 年 10 月）



東館建築風景（平成 10 年 11 月）